

農村女性の老後生活に関する追跡研究—11年前調査との比較—

○常葉学園大学 佐藤宏子 お茶の水女大生活 袖井孝子 佐藤裕紀子

目的 1982年、静岡県志太郡岡部町朝比奈地域の30～59歳の全有配偶女性439人に対して「農村女性の生活構造と老後意識調査」を実施した。11年が経過した1993年、同一対象者の追跡調査を行い、老後意識や老後生活に対する希望のどのような側面に変化がみられるのか、加齢と関連した対象者個人のライフ・コースや家族の変動は、老後意識等にどのような影響を及ぼしたかを明らかにする。

方法 1993年7月、82年調査の有効回答者403人に対して訪問面接聴取法による調査を実施した。有効回答者は、41～70歳の324人(80.4%)である。

結果 82年と93年の調査結果を比較すると、①老後不安では、「健康」が36.1→52.2%と大幅に増加した。②老後一番重要視したいことでは、「ゆったり暮らす」「趣味やスポーツに熱中する」が減少し、「仕事に打ち込む」が2.8→12.3%へと増加した。③老後の生計をどのように維持するかでは、体の丈夫な時期は「仕事による収入」が75%を占め、82年の63.7%を大きく上回った。また、体が不自由になってからは、82年が「子供の扶養」49.4%、「年金・恩給」29.9%であったのに対して、93年には「年金・恩給」44.1%、「子供の扶養」36.4%と逆転し、経済的に自立した老後生活を志向する者が増えている。④子供と「一貫同居」を希望する者は90.7→79.2%に減少し、夫婦健在のうち「近い所に別居」が増加した。⑤老後は「長男と住みたい」が80.4→70.5%、「長男の嫁に世話してもらう」は73.0→61.7%へ減少するなど、従来、強固であった“老後は長男”という意識に変化がみられる。⑥子供と同居の際には、生活分離を希望する者が大幅に増加した。